

[研究ノート]

シェリングの「マルキオン論文」について

長 島 隆

シェリングが「パウロ書簡の修正者としてのマルキオンについて」De Marcione Paulliarum Epistolarum Emendatore を1795年に神学の修士学位を取得するために執筆したことはよく知られている。だが、この論文を扱う研究は少ない。今回、「研究ノート」として、この「論文」を文献的な側面から整理しておくことにしたい。この時期はすでにシェリングがカントを学び、自らの哲学的な方向を「カントの超越論哲学」の方向に定めたことは明らかになっている。

だが、自然哲学へと進んでいくシェリングの方向を確定するのは何かを検討しようとする、シェリングの内在的な契機がよくわからないところがある。この「超越論哲学」に集中的に取り組む時期を前提にして、そこから理解しようとする、この時期には、1794年に「形式」論文を執筆し、引き続き超越論哲学的な傾向を持つ論文を執筆していた。1795年には、「自我」論文と「書簡」論文である。この三つの論文から、フィヒテとニートハンマーの編集した「哲学雑誌」に連載された「最新哲学文献概観」を経て、初期自然哲学の展開の時期が登場する。この背景には、当時シェリングが学んでいたチュービンゲンの思想動向、カントの道徳神学の衝撃から生まれたカント主義の神学研究があったことがよく知られている。シェリングもまた「書簡」論文の冒頭からの数章では、「道徳神」の問題を取り扱っている。まさにNeologieという宗教的な確信の傾向があり、この傾向にたいして、当時チュービンゲン神学校にともに学んでいたシェリング、ヘーゲル、ヘルダーリンらの神学的傾向が対立し、カントの真の後継者たらんとして、フィヒテをも受容するところにこの「超越論哲学」の方向に進んだことは理解できる。だが、そこからさらに自然哲学へと移行するシェリングの方向は、「ティマイオス評釈」(1794年)の存在があり、その影響があることは間違いないだろう。そうすると、この「マルキオン」論文の位置はどうなるのか、それが問題にならざるを得ないのではないか。

本稿では、「マルキオン」論文をめぐる研究動向を文献的に検証しておくことを、とりわけ「マルキオン」論文そのものの分析ではなく、その分析の前提を明らかにしておくことを課題としている。そのさい、複雑な当時の思想動向を確定するためには、当時の思想背景とともに、シェリングの「ティマイオス」についての研究ノートも公刊されていることをも視野に入れて、文献的に整理することになる。

1. シェリングの初期哲学におけるいわゆる「プラトン主義」の影響について

この時期は、したがって基本的に「マルキオン」論文は、研究の視野に入っていない扱いをされることになる。シェリングの自然哲学が、「自然の超越論的基礎づけ」から「自然哲学」の自立への短期間における展開に注目が行き、ほとんど無視されてしまう。そのなかで、シェリングの「自然哲学」にたいするプラトン主義の影響が問題とされる。そして、シェリングの「ベルリン遺稿 (Berlin-Nachlaß)」に、プラトンの「ティマイオス」についての若いころの評釈 (1794 年) が発見されたことが報告され、それが刊行されることになった。

① F.W.J. Schelling, „Timaeus“ . Zur Bedeutung der >Timaeus<-Handschrift Schellings (Schellingiana 4), hrsg. von Hartmut Buchner, Stuttgart-Bad Cannstatt:fromman-holzboog verlag, 1994.

そして、この書にはシェリングの「ティマイオス」についての研究ノートと、それにかんする Hermann Krings の解説 (Genesis und Materie) が収められている。この「研究ノート」は、フランス、イタリアなどでもそれぞれの言語で刊行され、編者が力のこもった解説を執筆している。

そして、この「ティマイオス」研究ノートを刊行前に、現物を見ながら研究したのが、
② Birgit Sandkaulen-Bock, Ausgang vom Unbedingten. Ueber den Anfang in der Philosophie Schellings, Göttingen: Vandenhoeck + Ruprecht Gm, 1990. であり、この研究もまたカント受容の文脈で言及し、その超越論哲学的傾向を解明している¹。

だが、この刊行前にも初期においてプラトンの影響を指摘する研究があった。Harald Holz (1930-)² と Werner Beierwaltes (1931-2019) の研究である。

③ Holz, Harald, Die Idee der Philosophie bei Schelling. Metaphisiche Motive in seiner Frühphilosophie, Freiburg/München: Verlag Karl Alber, 1977.

④ Beierwaltes, Werner, Platonismus und Idealismus, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann Verlag, 1972/2004.

⑤ Beierwaltes, Werner, Identität und Differenz, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann Verlag, 1980.

両者の議論は基本的に、自然哲学から同一性体系の時期の分析と、プラトンの影響を解

1 この「ティマイオス」評釈については、刊行後次の研究書が出ている。Franz, Michael, Schellings Platon-Studien, Vandenhoeck + Ruprecht Gm.:Göttingen, 1996.

2 彼には、今日マルクス・ガブリエルとの関係で重要な「事実性 (Faktizität)」概念を中心にして同一性哲学以後のシェリングを解明した次のものがある。Holz, Harald, Spekulation und Faktizität. Zum Freiheitsbegriff des mittleren und späten Schelling, Bonn: Bouvier Verlag, 1970. また私は学生対象の演習でカントの『純粹理性批判』を使用し、transzendentalを「内在的超越」と説明してきたが、まさに Holz が超越論哲学を解明した次のものを念頭に置いていた。Holz, Harald, Immanente Transzendenz. Zur Grenzwertbestimmung transzendentaler Vernunft und ihres Leistenkönnens, Würzburg 1997. も参照されたい。

明していた。とりわけ後者は、「ネオプラトン主義」的な影響の問題を解明し、しかも、それを文献的にも明らかにしていた。すなわち、シェリングは、ヴィンディッシュマン (Windischmann, Karl Joseph Hieronymus, 1775-1839) を介してプロティノスを知ったことが文献的に示されている。そして重要なのは、バイアーヴァルテスは、1805年、つまり、シェリングとエッセンマイヤーの論争の後で、シェリングがプロティノスを知り、取り組んだと指摘していることである。このヴィンディッシュマンとのネオプラトン主義をめぐるシェリングのやり取りは、④に「付論 (Anhang)」として掲載されている。

Anhang Windischmanns ‚Bemerkungen ‘ zu Schellings ‚Aphosirmen ‘ zu Einleitung in die Naturphilosophie

Windischmanns ‚Stellen aus Plotinos ‘

である。この二つの「付論」は、まさに往復書簡であり、後者が、プロティノスの *Enneades* からの抜粋のドイツ語訳である。これが1805年5月以前に成立し、シェリングに送付された。これは、まさにシェリングが1804年にヴィンディッシュマンにたいする問い合わせており、ヴィンディッシュマンが、それにこたえてドイツ語に訳し、送ったものである³。この時期にバイアーヴァルテスは、シェリングがプロティノスを知ったと主張する。その事情について紹介しておくこと次の論文がきっかけであったと言う。

⑥ Berg, Franz, *Sextus, oder über die absolute Erkenntnis von Schelling*, Würzburg: sebastian Sartorius, 1804.

ベルクは、1753年生まれで1821年逝去した、カトリック神学者であり、哲学者、歴史家である。この『セクストゥス』は、対話篇であり、セクストゥスとプロティノスのあいだで行われている対話という形態でなされたものであり、シェリングの批判である。バイアーヴァルテスによれば、この書をめぐって、プロティノスについて友人のヴィンディッシュマンに問い合わせ、プロティノスの重要な部分の抜粋を依頼した。それに答えたのが付論第2の *Stellen aus Plotinos* である。バイアーヴァルテスが指摘する論点は、すなわちベルクの批判の焦点は、まさに「実在的なものと観念的なものの同一性」そして「知的直観」であり、まさに問題はプロティノスをシェリングの信奉者と位置付けて「対話」を展開していることである。この内容はここでは問題にしない。問題はまさにシェリングがプロティノスを知ったのが、1805年以後であることである。ヴィンディッシュマンへの書簡を読むと、シェリングはこのベルクの作品を読み、プロティノスの位置づけに驚いたようであり、そのために、かれはヴィンディッシュマンに問い合わせをしたのである。それにたいして、この二つの付論はヴィンディッシュマンが依頼にこたえて、シェリングにた

3 W. Beierwaltes, *Plotin im deutschen Idealismus*, in: *Platonismus und Idealismus*, 83-153, besonders 101f.

いして送付したことを示している。

このようなバイアーヴァルテスの議論を考慮すれば、シェリング自身はまさにこの時期まで、自らの傾向を「新プラトンの」とは認識していなかったと言えるのではないか。むしろ「プラトン主義的」と自覚していたと言えるのではないか。そうすると、ここで、改めてシェリングの初期の傾向は「新プラトン主義的」か、あるいは「プラトン主義的」かが問題になるだろう。つまり、先の「ティマイオス評釈」が、このようなシェリングのプラトン主義の影響を具体的に示すことになった。だが、それは（シェリングの自覚では）「新プラトン主義」的な傾向ではなく、「プラトン主義的な傾向」である⁴。それを、クリングスの解説論文は示し、かつこの評釈について最初の研究である Sandkaulen の研究は、これらの研究がカント受容を前提することを示している。そして、この前提のもとで、「新プラトン主義的な傾向」として「プラトン」をシェリングが理解していることになる。そして、この方向の動因になっているのが「マルキオン」論文であると言えるのではないか。つまり、シェリングの歩みは「プラトン主義」→「グノーシス主義」→「新プラトン主義」という展開になると言えるのではないか。そうすると、「プラトン主義」とマルキオン論文はまさにここで結びつき、「新プラトン主義」への動因になっていると言えるのではないか。そのヒントになるのが、Franz の次の書である。

⑦ Franz, Michael, *Tübinger Platonismus: Die gemeinsamen philosophischen Anfangsgründe von Hölderlin, Schelling und Hegel*. Tübingen: Francke Verlag, 2012.

フランツは、当時の 1790 年ごろのチュービンゲンにおける神学論争をはじめとして、シェリング、ヘルダーリン、そしてヘーゲルの共通の思想背景として、チュービンゲンの神学部の動きがあること指摘して次のように述べている。

「シェリングの研究ノートには教父からの引用が多く、特にマルキオンに関する神学論文の準備としてグノーシス主義を研究した際には、レスラーの翻訳だけではなく、原典を幅広く読んでいたことを証明している。彼の場合、もちろん、そのような読書の効果は直接確認できないか、ないしは再構築するのが非常に難しいだけである。」
(S.41)

「学生のシェリングが、レスラーの研究を徹底して利用することができたことは、彼の『グノーシス主義の歴史』プロジェクトの枠組みで相互に比較したい文献のリストからもわかる。このリストには、上で長々と引用した注解の中でレスラーが持ってきた

4 「プラトン主義」と「新プラトン主義」との区別はどこでなされるかについて、これは私の手に余るものである。ただシェリングに即してみると「力動的なもの(das Dynamische)」にあると言えるかもしれない。

たものが必ずしもすべて含まれているわけではないが、教父叢書 (*Bibliothek der Kirchen=Väter*) の中でレスラーが編集したものから引用した可能性も十分にある。」(S.42)

さらに、シェリングの依拠した文献について次のように述べている。

「残念ながら、これらの抜粋は残っていないが、存在していた。このように、早くも 1793 年 -- この年に『グノーシス主義の歴史』の草稿が日付をつけられた -- には、シェリングのネオプラトン主義への関心が高まっていたが、当面はまだ二次資料を利用していた。」(*ibid.*)

そして結論的に次のように言われている。

「このような新プラトン主義者への関心は、当初、1793 年のシェリングのグノーシス主義研究に引き継がれたが、この研究では、シェリングが冒頭に分類した『グノーシス主義は、非常に多くの異なる体系と、非常に多くの宗教や哲学の断片から構成されているために、正確には非常に不明瞭であるという難点と戦わなければならなかった。しかし、これらは分離しなければならない』。シェリングはすぐにこの仕事を放棄し、40 年後までこのような調査を再開することはなかった。」(S.71)

シェリングの関心がまさにカント受容を背景として、プラトン主義からグノーシス主義へと動き、それが超越論哲学から自然哲学への展開として結実することになると言えるのではないか。そして宗教哲学的な関心は、この自然哲学の上に哲学的転回を経て、現れてくることになると言えるだろう。この点は、次の項で言及する Bauer の議論にもかかわる。

2. 新プラトン主義、グノーシス主義、そして「マルキオン」論文

このように見てくると、シェリング自然哲学 - 同一性体系の基本的な背景となるのは、カント以来の「超越論哲学」であり、まさにチュービンゲンの「カント受容」後のカントの衝撃の大きさを感じさせるような神学者たちの創造活動である。それに新プラトン主義であり、それにたいしてグノーシス主義がバイアスを与えているということになる。しかし、「新プラトン主義」と「グノーシス主義」とは、どのような関係にあるのか。少なくとも確認できることはシェリングの「神学研究」なるものが、まさにカント主義の理解をめぐってチュービンゲンの神学者たちと対立するものであることであり、また「プラトン主義」から「グノーシス主義」を経てくるのが事実的に確認できるのではないか。

1) まず確認しておきたいのは、グノーシス主義とは何かである。

グノーシス主義と新プラトン主義は、方向性が逆でありながら、理論としては同じ構造を持っていると言えるのではないか。つまり、グノーシス主義とは、キリスト教に根をもち、キリスト教の異端と言われている。それにたいして、新プラトン主義とは、ギリシャ思想から出発してキリスト教に近づいた思想である。その意味で、方向性が逆であると言えるだろう。現在グノーシス文書は邦訳されていて、確認できる。いわゆる「ナグ・ハマディ文書」である。そして、「ナグ・ハマディ文書」はほぼ訳され、研究書も刊行されている。

⑧荒井献／大貫隆／小林稔／筒井賢治訳、ナグ・ハマディ文書 I から IV、岩波書店、1997年、1998年、1998年、1998年

⑨荒井献／大貫隆編、ナグ・ハマディ文書・チャコス文書 グノーシスの変容、岩波書店、2010年

研究書としては、次のものがある。

⑩荒井献、原始キリスト教とグノーシス主義、岩波書店、1971年。

⑪筒井賢治、グノーシス。古代キリスト教の〈異端思想〉、講談社（講談社メチエ）、2010年。

⑫大貫隆／島蘭進／高橋義人／村上陽一郎編、グノーシス 陰の精神史、岩波書店、2001年。

⑬同上、グノーシス 異端と近代、岩波書店、2001年。

⑭大貫隆（訳、著）、グノーシスの神話、講談社学術文庫、2014年。

⑮ハンス・ヨナス（秋山さと子／入江良平訳）、グノーシスの宗教 異邦の神の福音とキリスト教の端緒、人文書院、1986年。

そして洋文献で次のものが重宝する。

⑯ Baur, Ferdinand Christian, Die christliche Gnosis oder die christliche Religions=Philosophie in ihrer geschichtlichen Entwicklung, Tübingen: Verlag von C.F. Osiander, 1835.

バウア（1792-1860）は、チュービンゲン大学福音主義神学部の正教授で、ヘーゲル学徒であったが、自由主義的なチュービンゲン学派の指導者であった。彼は、同世代のネアンダー（Neander, August Joachim Wilhelm, 1789-1850）の研究、マター（Matter, Jacques, 1791-1864）、レヴァルト（Lewald, Ernst Anton, 1790-1848）そしてギーゼラー（Gieseler, Johann Karl Ludwig, 1792-1854）を視野に入れ、包括的にグノーシス研究をまとめている。その意

味では本書はバランスの取れた良書と言えるのではないか。グノーシス主義の基本的理念の起源を探ると、当然のこととして、マニ教、ゾロアスター教などの問題が浮かび上がっている。バウアは、これらの点でも当時のオリエンタリズムの成果を吸収して検討している。マルキオンだけではなく、グノーシスの包括的な研究になっている。上記のヨナスの研究とともに重要な参考文献となるだろう。

バウアの研究史の評価をまとめてみておきたい。まず第1段階である。この時期を代表するのがマスエ (Massuet, René, 1666-1716) である。彼はイレネウスの著作を5冊にまとめて編集した。この時期は、グノーシス主義と新プラトン主義の関係を問題にし、後者が前者の前提であるという評価が定まった。

第2段階は、グノーシス主義の東洋的な淵源が問題になった。モスハイム (Mosheim, Johann Lorenz von, 1693-1755) は、当時のオリエンタリズムの流れの中で、グノーシス主義の淵源を東洋哲学にまで視野を広げ、とりわけ、ゾロアスター教、マニ教を問題にすることになった。バウアによれば、モスハイムの研究にたいしては、「様々なグノーシスの体系を細分化し、分割し、分類するために、自然な分類の根拠を得ようとしなかったという事実にみられるように、つねに具体的な直観の欠けた無生物の抽象物」(Baur,5) であり続けていると述べている。

第3段階は、代表する人物を挙げておくと、前述のネアンダー、レヴァルト、ギーゼラー、マターである。この第3世代の人物は、すべてバウアと同世代であり、バウアにとっては歓迎すべき新しい世代であり、グノーシス研究の新しい流れであると言えるだろう。ちなみに、バウアが参考にした、これらの人の成果を上げておく。

⑰ Neander, August Joachim Wilhelm, *Genetische Entwicklung der vornehmsten gnostischen Systeme*, Berlin 1818.

⑱ Lewald, Ernst Anton, *Commentatio ad historiam religionum veterum illustran. dam pertinens de doctrina gnostica*, Heidelberg 1818.

⑲ Gieseler, Johann Karl Ludwig, *Vorzüglich in der ausführlichen Beurtheilung der beiden zuvor genannten Schriften von Neander und Lewald in der Haller Algem. Lit. Zeit.* 1823. April nr. 104. S. 825. f. 11

⑳ Matter, Jacques, *Histoire critique du Gnosticisme et de son influence sur les sectes religieuses et philosophiques des six premiers siècles de l'ère chrétienne*. Ouvrage couronné par l'Académie royale des inscriptions et belles -lettres. 2 Thle. Paris 1828. (Aus dem Französischen überferzt von Chr. H. Dörner. Heilbronn 1833).

パウアは、これらの人物の中で、とりわけ、ネアンダーを高く評価し、この新しい同世代の研究の評価ともいえる次のような指摘を行っている。

「ネアンダーが最初に行った、グノーシス派をユダヤ主義者と反ユダヤ主義者の二重のクラスに分けることである。これは、グノーシス体系のカラフルな多様性に光と秩序をもたらすだけでなく、その内部組織とその原理をより深く理解するための、最初の明確な基準点となった。」(Baur,8)

そしてネアンダーは、まさに「一般的な問題をほとんど避けて、すぐにグノーシス主義の諸体系の内部発生と構築の研究に直接乗り出した」(Baur,7)。これらの評価は、当然これらの人々にたいする批判はあるとしても基本的なパウアの評価と言えるだろう。そして、これらの研究を可能にしたのは時代的なものがあること(国、民俗の研究が拡大したこと、新しい資料が解放されたことなど)も確認している。

しかも、重要なことであるが、パウアは、このグノーシス主義的なものは、純粹に歴史的なものにとどまらず、キリスト教に繰り返し現れることを指摘している⁵。

2) シェリング研究とグノーシス研究

すでに述べてきたように、シェリングの「マルキオン」研究はまだ緒についたばかりでこれからの課題になるだろう。シェリングの「ネオプラトンの」傾向、あるいはグノーシス的傾向は、すでに述べてきたように、同一性哲学以後の問題ととらえられる傾向である。

とりわけ、中期シェリング(自由論及び世代論以後)においては、この点がある意味戦後のシェリング研究の中でも中心的なものであるかもしれない。バラケルスス、ヤーコブ・ベームとの関係・影響を問題にする研究などがそれであるだろうし、さらに注目すべきはユダヤ教のカバラの思想傾向とシェリングの関係を問う傾向である。これはまずハーバーマスの書を挙げればよいかもしれない。

②1 Habermas, Jürgen, Das Absolute und die Geschichte: Von der Zwiespältigkeit in Schellings Denken, 1954.

②2 ハーバーマス、理論と実践、未来社、1975年、1998年(新装版)

後者に収められたシェリング論「唯物論への移行における弁証法的観念論－『神の収縮』というシェリングの思想からの歴史哲学的推論」159-246ページは、このカバラとの関連を問題にして刺激的である。

5 おそらく、先に挙げた大貫らの論集もまたこの点を追跡したものと言えるだろう。さらに、グノーシス主義とは対立するネオプラトニズムについても、参照になる。水地宗明、山口義久、堀江聡編「新プラトン主義を学ぶ人のために」世界思想社、2014年。

なお、前者はハーバーマスの学位論文であり、シェリング研究から彼が出発したことは重要である。

そしてこの分野の研究は昔から行われており、最近のものだけを挙げておきたい。

⑳ Schulte, Christoph, *Zimzum in the Works of Schelling. Iyyun: The Jerusalem Philosophical Quarterly*, vol.41, 21-40, 1992

㉑ Bielik-Robson, Agata, *The God of Luria, Hegel and Schelling. The divine contraction and the modern metaphysics of finitude. Mystical Theology and Continental Philosophy*, 2017

㉒ Franks, Paul, *Mythology, essence, and form: Schelling's Jewish reception in the nineteenth century. International Journal of Philosophy and Theology*, 80:1-2, 71-89, 2019.

さらに、筆者が司会を務めた本学の国際哲学研究センターでのシンポジウム「哲学と宗教」の成果は刊行され、次のものが、まさにこの論題にかかわるものである。

㉓ 永井晋、神の収縮（ツィムツム）－シェリング『世界年代』とルリアのカバラー、国際哲学研究、別冊5、94 - 100、2014年

㉔ 小野純一、収縮をめぐるシェリングとイブン＝アラビー、国際哲学研究、別冊5、101 - 121、2014年

またこの点で参考になるものとして二つの論集を挙げておく。

㉕ Schulte et al., *Kabbala und Romantik. Die jüdische Mystik in der romantischen Geistesgeschichte*, Tübingen, 1994.

㉖ Bielik-Robinson, Agata/Weiss, Daniel H., *Tsimtum and Modernity. Lurianic Heritage in Modern Philosophy and Theology*, Berlin and Boston: Walter de Gruyter, 2021

私自身は、これらの議論にたいして、影響問題から見のではなく、超越論哲学の立場に立ち、そこから自然哲学を解明するシェリングの歩みから、同一性哲学という体系化を図るときに、逢着したシェリング自身の問題、つまり個体の問題の解決として、シェリングがこの「ツィムツム」に着目したとかがえている。シェリングは、自然哲学期には、自然物を根源的力の衝突とその均衡点の問題として考えていた。だから、同一性哲学においては「量的差別」としてとらえることになった。だが、このような展開は、まさにヤコービによる批判に基づき、個体を捉えることができないこと、直接には、エシェンマイヤーから、「流出論」という批判を浴びて⁶、その問題の解決として、個体 - 有限性の問題を解決するために出会ったのが、まさにこの「ツィムツム」であったと言えるだろう。

6 この点については、次のものを参照されたい。Whistler, Daniel, *Schelling on Individuation. Comparative and Continental philosophy*, vol8 (3) 329 - 349, 2016. ここで、ヤコービの批判と述べているのは、まさに1799年のFichte宛書簡における「ニヒリズム」という批判である。

3. マルキオンとシェリングの「マルキオン」研究

「マルキオン」論文のもっとも精密な成立史については、ヤンツェンの刊行中の Historisch-Kritisch Ausgabe の第2巻（1980年）の編集者（Editorischer Bericht）の解題が何よりも参考しなければならない。そして、新しく、今日「マルキオン」論文を含めて、先の事情を視野に入れた包括的な研究は、Arnoldの次のものであろう。ここでは書名だけを紹介しておく。

③① Arnold, Christopher, Schellings frühe Paulus-Deutung. Die Entwicklung von F.W.J.Schellings Schriftinterpretation und Christentums-theorie im Zusammenhang der Tübinger Theologie seiner Studienzeit und hermeneutischen Theoriebildung seit der Frühaufklärung(Schellingiana 29), Stuttgart-Bad Cannstatt: frommann-holzboog, 2019.

まず第一に、「マルキオン」について検討しておきたい。

1) 「マルキオン」研究とグノーシス主義について

今日に至るまで、マルキオンについての研究は、ハルナック（Harnack, Karl Gustav Adolf, 1851-1930）の次のものが基本になるようである。

③② Harnack Adolf von, Marcion. Das Evangelium vom Fremden Gott. Eine Monographie zur Geschichte der Grundlegung der katholische Kirche, 1921.

ハルナックは邦訳がある『キリスト教の本質』Das Wesen des Christentums, 1900で日本でも知られているが、彼は学位論文で、グノーシス主義について書いており、そもそもグノーシス主義を基本テーマとしている⁷。そして研究史的にもハルナック以前と以後に分かれるようだ。ヤンツェンもこのハルナックの著書に言及しているが、これらのマルキオン研究書では、シェリングの「マルキオン研究」は言及されていないし、いわゆる「マルキオン研究」及びグノーシス主義研究では、シェリングの「マルキオン研究」は問題にされていないことを象徴している。それがおそらく「グノーシス研究」の文脈におけるシェリングの「マルキオン」論文の位置づけであると言ってよいだろう。最近の研究では、次のものが参考になる。だが、これらでもシェリングの「マルキオン」論文は言及されていない。

③③ Hoffmann, R. Joseph, Marcion: On the restitution of Christianity. An Essay on the Development of Radical Paulinist Theology in the Second Century, Eugene, Oregon: Wipp & Stock, 1984.

7 Harnack, Adolf, Zur Quellenkritik der Geschichte des Gnosticismus, Leipzig: Verlag von E. Bidder, 1873. がハルナックの学位論文である。

③4 Lieu, Judith M, Marcion and the Making of a heretic. God and Scripture in the second century, University Press: Cambridge, 2015

日本においては、マルキオンそのものに議論を集中しているのは、次のものがある。

③5津田謙治、マルキオン思想の多元論的構造—プロレマイオスおよびヌメニオスの思想との比較において、一麦出版社、2013年

マルキオン自身が最大の異端と呼ばれる評価を持っているがゆえに、津田が指摘するように、マルキオンの原典は残っていないようだ。マルキオンについて知るためには、マルキオンにたいする敵対者たちの「反論」があり、そのなかで、マルキオンの断片が引用されており、それが参考になるということである。そのなかで最も重要なのは、テルトゥリアヌスの「マルキオン論駁」であるが、これはまだ邦訳がない。だが、次の英訳がある。

③6 Tertullian, The Five Books of Quintus Sept. Flor. Tertullianus Against Marcion, Hard Press

これは、Peter Holmesの翻訳で、1878年にエディンバラで刊行されてもののファクシミリ版である。また現在、「テルトゥリアヌス・プロジェクト (The Tertullian Project)」において、テルトゥリアヌスの原文及び翻訳がデジタル化されて公開されている(2021年5月最終アップデート)。上記の英訳も含め、仏訳、独訳が公開されている(ただし、独訳は第4冊まで)。独訳版は、Heinrich Keller訳、1882年。仏訳はGenoude訳で1852年版である。

マルキオンの諸文献が現在残っていないのは、彼がまさに異端として断罪され、彼の執筆したものが焚書にされたからである。

それでもなお、グノーシスの問題、とりわけマルキオンが重要な意味を持つのは、単純に歴史的な関心からばかりではなく、バウアが指摘しているように、グノーシスの問題は、キリスト教に総則的に繰り返し登場してくる一つの傾向であることを意味していると言えるのではないか。現代哲学の中でもハイデッガー、ユングの名前が挙げられるし、また宗教運動の中でも再生してきているのは、グノーシスの問題の奥深さを示していると言えないか。ただし、これらは、ある意味で理解しやすいし、神秘主義的傾向の思想傾向がそれを示している。それは、大貫らの編集による論集でも、特に、示されている。ここでは、分析系における資料を挙げておきたい。

③7 An interview with Richard Rorty. Gnosis, vol.VIII, N.1, 2006

③8 Kurstak, Daniel, Communicative Rationality, Pragmatist Enlightenment, and the Aztec Cosmology Problem. Gnosis, vol. XIII, 2011

分析系とグノーシスとの関係についての論文はまだ少ないように思われるし、前者は、ローティと「グノーシス」編集部のインタビューであり、クルスタックのものはまさに数少ない論文である。

2) シェリングの「マルキオン」論文の成立史

当然これは、刊行中の *Historisch-Kritisch Ausgabe* の第2巻(1980年)の編集者の解題(Editorischer Bericht)で、ヤンツェンが指摘していることを受けている。このことはもう一度検討しておきたいと思う。

よく知られているように、シェリングは、当時チュービンゲン神学校の学徒であった。しかもすでに指摘しているように、ヘーゲル、ヘルダーリンとともに過ごした時期である。そして、1792年10月24日に彼は神学部に登録した。これを前提にして、ヤンツェンの指摘を見ていくことにする。ヤンツェンは、当然 Plitt および Fuhrmans の書簡及び伝記を土台にし、特筆すべきは、現在まだ未整理で、整理と刊行が進められている Berlin-Nachlaß をも視野に入れてこの「編集者報告」を執筆している⁸ ことである。また当然のことであると言えるかもしれないが、ヤンツェンは、後に見るハルナックの著書及び、すでに見てきたパウアの著書、そしてヨナスの著書を視野に入れていることも注意を要する。先取的に言えば、ヤンツェンのこの「編集者の報告」は、基本的な研究を踏まえた、シェリングの「マルキオン」論文についての、現在の最高水準の論文であると言えるのではないか。

まずヤンツェンが指摘するのは、当時シェリングが学んだ4人の神学者がいたことである。まず第1に、シュヌラー(Christian Friedrich Schnurrer, 1742 - 1822)であるが、シェリングは彼のもとで、二つの課題論文を書き、学位を習得した。これが1792年である。つまり、「人間の根源悪の起源について」を書き、さらに「別名なき哲学の可能性について、ラインホルトの根本哲学についての若干の評釈と並んで」と「理論的理性と実践的理性の批判の一致について。とりわけ諸カテゴリーの使用、そして叡智的世界における事実を介して叡智の世界という理念を実現することについて」である。哲学的には、シェリングは、カントの宗教論と批判書を丹念に勉強しており、しかもラインホルトの「根本哲学

8 このベルリン遺稿は、プロイセン科学アカデミーに残されていたものであり、本文で述べたようにまだ未整理であり、シェリングの遺稿としては、ミュンヘンに残されていた意向が第2次世界大戦中に爆撃により焼失してしまっており、これだけが残されている。私がベルリンの Schelling Forschungstelle zu Berlin を初めて訪れたとき、当時の所長の Hans Poser 教授(Technische Universität zu Berlin)と話す機会があり、東独の科学アカデミーの所有であり、この遺稿の権利関係が難しいものがあり、ミュンヘンコミッションにうつすことができない、そのため Berlin でその編集をしなければならないと述べられていた。この編集の成果は次のようなものが刊行されている。Elke Hahn,

また、Bremen の Sandkühler のグループが、シェリングのベルリン遺稿の中から Schellings Jahreskalender を整理し刊行を目指している。F.W.J. Schelling, *Philosophische Entwürfe und Tagebücher* として、今日まで、1809年 - 1813年、1814年、1846年、1848年、のものが刊行されている。

(Elementarphilosophie)』をも視野に入れている⁹。

第2に、ル・ブレ (Johann Friedrich Le Bret, 1732 - 1807) であり、第3に、シュトール (Gottlob Christian Storr, 1746-1805) である。彼はチュービンゲン学派の創始者であり、シェリングとは、父親を通じて、私的にも緊密に結びついていた。そして注意を要するのは、シュトールがシェリングの「マルキオン」論文の指導教授を務めていることである。第4に、フラット (Johann Friedrich Flatt, 1759 - 1821)。彼は、1785 年来哲学部での員外教授であったが、1792 年に神学部の員外教授に移った。シェリングはすでに哲学部でフラットを聴講し、彼を知っており、神学部で彼の授業に出ることになった。

シェリングはこれらの人のもとで神学を学んでいた。まず、パウロ書簡についてフラットのもとで 1792・93 年の冬学期に読んでおり、さら、シュトールのもとで 1794 年と 1795 年に読んでいる。

それと同時に、シェリングはすでに神学への思考から離れていたことにも注意を要しよう。そのため、彼の神学部での「マルキオン」論文の審査は、シュトールのもとで、満場一致で合格しているが、シュトールは神学研究にとどまることを要望している。シェリングの神学研究は、当時 1790 年から 1792 年にかけて、チュービンゲン神学校の補習講師を務めていたカール・イマヌエル・ディーツ (Carl Immanuel Diez, 1766-1796) の影響があるとされる。ディーツについてはディーター・ヘンリッヒの研究に詳しいが、彼は熱烈なカント哲学の信奉者であり、シェリング、ヘーゲル、ヘルダーリンとの交流もあったし、シェリングとは、ディーツがチュービンゲンに行く前に、1790 年までベーベンハウゼン副司祭を務めていたために司祭のしていたシェリングの父を通じて知っていた。加えて、彼はフランス革命の熱烈な支持者であったため、先の 3 人が「自由の樹」を植樹したというエピソードも彼の影響であったろう。

とはいえ、シェリングが 3 年間勉強をおろそかにしたわけではない。むしろ、この 3 年間はきわめて精力的に「神学研究」を行っていたことが確認されている。

1793 年冬に研究したことを、彼の息子が挙げているものをヤンツェンは紹介している。まず第1に、新約の書簡、パウロ書簡にかんする。これらは現存しているとされる。第2に、福音的なもの、しかも共観福音書の加工、さらに、第3に、ガラテア書簡についての論文および 1792 年 12 月 24 日の期日がつけられている「ローマの信徒への手紙の特定の箇所に関する考察」(うらにイエスの死の目的についてのパウロのさまざまな表現の在り方) という題目がつけられている)、第3に、すでに逸失してしまっているエフェソス書簡へのメモ。

こういったものがシェリングの 3 年間の神学研究であるが、シェリングの関心は、パウロからキリストの教えを再構築することであり、しかもカント的な観点からそれを行うこ

9 Jantzen, S.185。ヤンツェンは Fuhrmans の第 1 巻 41 頁を指示している。

とにある。そして重要なのはシェリングの研究は、「聖書の規範を歴史的に批判することは同時に、シェリングの表現を使えば、聖書の中に感覚化されているものを思弁的に検討することを意味する」(Jantzen, 193)。

ここから、シェリングは「マルキオン」論文を書くわけであるが、このシェリングの選択はその関心から見て正当であるようである。だから、ヤンツェンは、ハルナックが「マルキオンを宗教の創始者」と呼んだことを挙げている。マルキオン¹⁰こそが「何がキリスト教の宗教とみなされるべきかについて非常に具体的で広範囲な決定を行った」(Jantzen, *ibid.*) のである。

さらに、ヤンツェンは「ベルリン遺稿」から、関係するノートを取り出し、分析している。これはヤンツェンの報告が極めて高い水準のものであることを示すものである。公表されたのが、1980年であるのは、まさに、西独と東独とが分かれている状況である。この状況で、きちんとベルリン遺稿を視野に入れることができたことは、西独と東独とが政治的に対立しながらも、まさに学問的には強い交流があったことを示している。それが70年代には成立していたことを確認できる。この時期、シェリング研究というのは、まさに東独で、イエーナ大学を中心に行われており、またイタリアで一連の編集も行われていたし、シェリング自身が生存中には、ロシアから彼のもとに聴講に来た学生がいたことも知られている。それらの国が学問的に結びついていたことを想起させるのが、ヤンツェンのこの報告である。

簡単に報告を検討したい。手書きの原稿は、ベルリン遺稿の中に約250ページの冊子に掲載されている。「古代哲学の表現様式」という題目を持っている。最初の部分が18ページであり、「詩人、予言者について」(Über Dichter, Propheten)、1792年8月の日付があり、プラトンについて書かれている。自然哲学にかんする文章が11ページ。「ハキムの著作からの抜粋」(Parallelen aus Hakim's Schriften) が続き、偉大な人物一般における神的影響」(Göttl. Wirkung in großen Männern überhaupt)、5ページがある。そして、「マルキオンについて (De Marcione)」についての予備作業が72ページである。

この予備作業は、書き損じ、上書き、下書きが頻繁にみられるが、全体として個々の区分で冒頭に論文としての文章がある。そして、参考文献、抜粋、論証など参照点を示す記述がある。4つの区分に分かれ、I. 一般的説明、II. 異端者の墮落について何が確かであるかが、私たちにとってどのように重要かの叙述、a) 新約のテキストの重要な歴史について、b) 先住民の批評家と異端者、正統派 III. 現代文献の知識 IV. 記録のデザインである。IIIでは、ミル、ウェットシュタイン、サイモン、ゼムラー、グリースバッハ、レフラーが挙げられている。

とりわけ、I. で問題になるのは、「歴史的証人の問題とその信頼性の評価」とされている

る。「歴史的証人」がマルキオンの正典を知っていたかどうか問題にされる。イレネウス、テルトゥリアヌス、エピファネスが挙げられるが、この検討が4ページ与えられて、そして「グノーシス派、とりわけマルキオンにたいする、それ自体根拠のない非難に、たとえ教父たちがまったく意図していなかったとしても、認められるべき意味を与えている」(Jantzen, 197) とヤンツェンは紹介している。

そして、重要なのは、バウアが指摘したグノーシスの3段階との関連でいえば、シェリングがバウアよりも十数年早い時期に生まれており、この3段階のうち第2段階と第3段階のあいだに位置していることである。シェリングは、まさに第1段階のイレネウスの諸著作は見ることができ、またモスハイムの研究を視野に入れることができた。実際、ヤンツェンはモスハイムの名前を挙げている。その意味でも、10代のシェリングのこの研究が極めて高い準備を行っていたことを示していると言えるだろう。その意味ではシェリングが批判的になったシュトール、フラットラのシェリングに対する指導もかなり高く正確なものであったのではないかと思われる。

そして、教父や文献からの抜粋が中心となる16ページの補遺がある。ここでは、アイザック・ドゥ・ボーソブレ (Isaac de Beasobre, 1659-1758) からの抜粋が特筆されている。ボーソブレは、福音主義の牧師であり、シェリングが抜粋した『マニとマニ教の批判的歴史』2巻で有名である。シェリングは、この書から4ページ半にわたって抜粋しているという。

そのあとに、二つの草稿が出てくる。すなわち、「テルトゥリアヌスにおける教会の伝統と信仰規則」、「イレネウスにおける信仰規則」である。これらは後の時期にかかれているとされる。

そして、105ページの「グノーシス主義の歴史」が草稿として残っている。ちなみに、前述のように、この草稿はすでにミヒヤエル・フランツの著書にかんして述べたさいに、フランツもまた重視していたものである。この草稿は、後に利用できるように箇条書きでページを記入したり、文献を参照する。そして、「古代グノーシス主義を歴史的にも哲学的にも体系的に導き出す」という目標を掲げている。そして、これは、古代グノーシス主義が非常に異なった体系と非常に多くの宗教や哲学の断片からなっているために、不明瞭だとシェリングは考え、それを区別することから始めている。

これはまさにグノーシス主義のシンクレティスム—折衷主義を、腑分けし、純粹なものと融合してくるものとを分け、その融合の仕方を見ようとするものである。そのため、まさに、当時のグノーシス主義の研究段階を踏まえて、しかもプラトンへの関心から、先に指摘した「詩人、預言者について」がまさにプラトンを中心としていることが示しているのだが、その流入してくる東洋的なものとを区別しその融合の仕方を見ようとしている。

ヤンツェンの紹介にしたがってみていくと、シェリングはこのシンクレティスムスを「中間の道」あるいは「衝突の道」として特徴づける。このような特徴づけは当時の「新啓蒙主義的神学」すなわち Neologie が標的とされている。「啓蒙主義がその対立物に転倒するというこの弁証法は、シェリングにとって彼が冒頭で語る神学の危機を意味するように見える」(Jantzen, 189)。この目標を達成するために取り組まれていることを示唆するのがこの「グノーシス主義」の歴史であるだろう。

だから、シェリングはここで、哲学的推論と歴史的演繹とに分け、歴史的演繹を克明に行おうとする。アジアの最初の文化について、エジプトを取り扱い、さらに、ヒンズー教の古代システム、を取り扱う。そして最古のギリシャとオリエントのつながりを歴史的に解明している。シェリングは、ピタゴラス学派、プラトン学派、カバラ、グノーシスを挙げている。

そして第2部として、ユダヤ人の歴史を取り扱う「感性界の被造物を叡智界に移住させるユダヤ人の極端な体系」が問題とされる。まさにこの項で、シェリングは、旧約の問題、特にユダヤ人の問題を扱い、それと西洋と東洋の哲学の融合形態としてのカバラを取り扱う。

そのあとに「経験システム」としてのキリスト教の問題を取り扱う。その第1のポイントは、キリスト教の台頭の問題、第2のポイントが、端的に教会制度の問題。第3のポイントがヨハネとパウロのシステムだと言われる。この第3点で、反ユダヤ的なシステムが問題にされ、ユダヤ教から独立したシステムか、ユダヤ教徒対立しているがユダヤ教やカバラの影響があるものとしてグノーシス主義に属する人物が挙げられている。前者に属するのがマルキオンとプトレマイオスであり、後者に属するのがヴァレンティヌス (?-269)、サトルニヌス¹¹、ハシリデス (85年頃-145年頃) などである。

続けて、シェリングの考察は、単なる哲学的システムとしての、新約に出てくる魔術師シモン・マグス、グノーシスの変種などが考察されている。そして、これらの検討は「パウロ系とグノーシス系の中間的システム、キリスト教的グノーシスである新プラトン主義の支持者」へと続く。ここで「新プラトン主義の支持者」として挙げられるのはアレクサンドリアのクレメンス (150?-215?) と殉教者ユスティヌス (100頃-165)、アテネのアテナゴラス (2世紀中ごろ) であり、次の「異教とのネオプラトン主義者」では、レスラーの存在が挙げられている。「ネオプラトン主義者」もまたここでは、あくまでもグノーシス主義との関連でのみ視野に入っているにすぎないと言えるだろう。

小括

このように見てくると、シェリングの「マルキオン」論文に至る神学研究はきわめて集

11 Lucius Appuleius Saturninus (100年頃) か。

中的に行われ、初めから当時のチュービンゲン学派にたいする批判的な態度から始まった。しかも注意を要するのだが、この指導者であるシュトールやフラットは高い水準でシェリングを指導していたと思われる。シェリング自身その「教え」にしたがい、当時の水準で入手可能な資料をこなしていたことがわかる。

そして、彼がカント哲学を受容し、フィヒテに傾斜しながらも、彼の歴史に対する強さもうかがえる研究を行っていたことがわかる。それは、ベルリン遺稿の中に残されたマルキオン論文にかかわる資料もまた、それが、シンクレティスムとしてのグノーシスをその融合形態を一つ一つ見ていこうとする「グノーシス主義の歴史」という準備草稿にも痕跡が残されているのではないか。

これは、まさに歴史-時間経緯を重視する態度を示していると言えるだろう。しかもそれを哲学において行おうとする。「ティマイオス評釈」につけられたクリングスの解説論文が「発生と物質」という名前は、まさに現に存在する事象を発生論的に解明しようとする態度を示しているこの時期を象徴するものであるだろう。しかも、端的にパウアがグノーシスの一つの形態として取り扱うシェリングとヘーゲルについて、ヘーゲルの宗教哲学を挙げるとともに、シェリングではむしろ自然哲学をそれとして見ていることはきわめて示唆的なものがある。

シェリングの自然哲学はまさに存在を持続としてとらえ、生成のうちに捉えることを示すからである。東洋的なものと西洋的なものの融合形態であるグノーシス主義は、その現実的なありようと、まさにそこに至るプロセスを重視するシェリングの思考訓練にとって極めて重要な役割を果たしているように思われる。そして、まさにプラトン（プラトン主義）からグノーシス主義そして新プラトン主義へというシェリングの思考の流れもまた、シェリングの一貫した思考の方向とその深化の形態を現しているように思われる。

キーワード：グノーシス、ネオプラトン主義、カント主義、マルキオン、道徳神学批判